

教育研究業績書

2025年05月07日

所属：英語グローバル学科

資格：講師

氏名：小野 薫里

研究分野	研究内容のキーワード	
異文化コミュニケーション、英語学、言語学	英語教育、帰国子女、アイデンティティ形成、日米の教育制度	
学位	最終学歴	
修士（英語コミュニケーション）	青山学院大学 国際政治経済学部 国際経営学科修了 松山大学大学院 英語コミュニケーション学科修了	
教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. ゼミにおける異文化コミュニケーション教育の実践	2023年9月現在	ゼミでは、「異文化コミュニケーション」を中心テーマに据え、日本に暮らす外国人が直面する宗教的配慮、食文化の違い、偏見や差別といった具体的な課題を取り上げた。学生は、モスクなどの宗教施設の見学、在日外国人へのインタビュー、関連文献の調査などを通じて、自ら問いを立て、主体的に調査・発表を行った。発表後には相互コメントやグループディスカッションを行い、多様な価値観や背景を理解する力、批判的思考力、そして他者に自分の考えを的確に伝える表現力の育成に努めた
2. 学生支援・課外活動に関する実績	2023年4月現在	武庫川女子大学英語グローバル学科公認の学生ボランティア団体MEC（Mukogawa English Community）において、学生が主体的に行う国際交流活動、英語教育支援、SDGs関連イベントの企画・実施が円滑に進むよう、教員として運営支援や関係部署との調整を行った。2023年度および2024年度には、MEC所属の学生が中心となり、学内での国際交流イベントや、留学生との京都における半日観光などを実現し、年間を通じて計8回の交流イベントと20回を超える企画・運営に関するミーティングを実施した。 また、学外活動として行われた京都での見学やフィールドワークでは、事前準備や外部関係者との連絡調整などを担当し、教育的効果が高まるよう配慮した。付属幼稚園との連携活動においては、授業見学や園児との交流に関する日程調整や安全面への配慮を行い、学生が安心して実践的な学びに取り組める環境づくりに努めた。 さらに、SDGsをテーマとした地域連携活動においては、学生の社会的関心の醸成に資するよう支援を行った。これらの活動成果を日英両言語でリンクレポートにまとめた。
3. 実務経験と連携を活かしたツーリズム教育の実践	2023年4月2023年7月	「ツーリズム概論」（履修者数220名）において、ホテルのコンシェルジュ業務の実務経験を活かし、観光業界における実践的知見を提供する授業運営を行った。授業の一環として、航空・宿泊・旅行の各分野からゲストスピーカーを招聘し、業界の最新動向やキャリア形成に関する助言を学生に提供した。 ゲストスピーカーには、東京ステーションホテルのチーフコンシェルジュ（Les Clefs d'Or Japan会員）、株式会社エイチ・アイ・エスの教育旅行担当者、ANA総合研究所の主席研究員（元客室乗務員）を迎えた。これらの特別講義は学生の職業意識の向上や進路選択への動機づけにつながった。また、本取り組みは大学公式ウェブサイトおよび学科ページにて紹介され、学外に向けた広報にも寄与した。
4. ゼミ活動におけるフィールドワークおよび卒業研究指導の実践	2021年4月2022年3月	ゼミ活動の一環として、2泊3日の沖縄フィールドワークを企画・実施し、現地の文化や歴史に触れる体験学習を通して、異文化理解を深めるとともに、教員とゼミ生間の信頼関係を築いた。

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
5. 導入教育における多文化共生理解の促進	2020年6月2022年7月	卒業研究指導においては、学生による英語での卒業論文執筆を支援し、完成した論文を文集として編集した。英語によるアカデミックライティングの実践を通じて、論理的思考力および表現力の育成を図った 毎年実施している新入生対象の導入講義において、日本在住のイスラム教徒の女性をゲストスピーカーとして招聘し、多文化共生への理解を深める機会を提供した。講義では、「イスラム」という語が「平和」を意味すること、ハラールに関する誤解、日本でイスラム教徒として生活する上での困難や偏見などについて、具体的な体験を交えて紹介された。講義前後には、受講生約100名を対象にGoogle Formsを用いたアンケート調査を実施し、講演による意識の変化を検証した。その結果、イスラムに対する「厳格」「怖い」といったステレオタイプの印象が薄れ、宗教や文化に対する理解の深化が見られた。本講演をきっかけに、アジアをはじめとする留学生との積極的な交流を希望し、異文化交流を目的とする学生団体やサークルへの参加を希望する学生も増加した。多文化社会における共生を考える出発点として、導入教育の意義を高める実践となった。
6. 英語ディスカッションを取り入れた受講生参加型の授業	2020年4月2021年3月	英語コミュニケーション特殊講義では、HAFUなどのドキュメンタリー映画やCool Japanなどの動画も積極的に使用し、日米の謝罪の仕方の違い、日米の人種差別問題に対する意識の違いなどを取り上げ、毎回異なるトピックを英語でディスカッションやプレゼンテーションを行った。海外で起きている諸問題も、より身近な問題に置き換えてみることで、学生の問題意識が高まり、英語が苦手な学生も積極的に発言する学生が増えた。
7. 読解速度向上を目的とした時事英語リーディング授業の実践	2020年4月2021年3月	時事性の高い英語記事を取り上げ、学生の関心を喚起しながらリーディング力の向上を図る授業を実施した。Breaking News Englishなどのオンライン教材をテキストと併用し、実社会と接続した内容を通じて実践的な読解力を養成した。特に、読解速度（Words Per Minute: WPM）の向上を目標とし、音読、黙読、タイムリーディングなど多様な訓練を取り入れることで、英語の処理速度と理解力の両立をめざした。
8. リーディング力育成を目的とした異文化コミュニケーション授業の実践	2020年4月2021年3月	120名を超える履修希望者を対象に、異文化コミュニケーションをテーマとした英語リーディング授業を実施した。異文化的な内容を題材とすることで、語彙や構文の理解を深めながら、多様な価値観や文化背景に触れる機会を提供し、リーディングスキルの向上と国際的視野の育成を同時に図った。授業アンケートにおいては、学生から「楽しく異文化を学ぶことができた」との肯定的なコメントが多数寄せられ、満足度の高い授業として評価された。
9. 地域産業への関心を高める英語プレゼンテーション授業の実践	2019年4月2020年3月	経営学部を学生を対象とした英語プレゼンテーションの授業において、地域理解と英語運用能力の向上を目的とした課題を設定した。学生は県の特産物を3つ選び、それぞれの魅力を英語で発信し、海外市場に向けて売り込む内容の発表を行った。 県内企業への就職を志望する学生が多いことを踏まえ、地域産業への関心を高めると同時に、実践的な英語表現を身につける機会となるよう授業設計を行った。学習者の興味と地域性を反映させた内容を通じて、主体的な学びと応用力の育成を図った。
10. 学習者主体の英語プレゼンテーション授業の実践	2019年4月2020年3月	1年次必修科目において、学生の発信力育成を目的とした英語によるプレゼンテーション授業を実施した。グループごとに外国人への街頭インタビューを行い、事

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
11. 音韻的インプットを活用したトップダウン型リーディング指導の実践	2019年4月2019年9月	前に作成した質問内容を教員が添削指導することで、実践的な英語運用力の向上を図った。インタビュー後は、得られた情報を整理し、パワーポイントを用いてグループ発表を行わせた。調査・準備・発表までを学生自身が主体的に進める構成とし、協働的かつ探究的な学びの実現に努めた。
12. 地域貢献における異文化理解と英語教育の実践	2018年4月2019年3月	音韻律に着目したトップダウン型のリーディング授業を実施し、学生の自律的学習の促進を図った。テキスト中の重要語を類義語に置き換えて読み上げるなど、集中力を維持する工夫を取り入れ、音声による意味予測力の強化に努めた。また、TEDプレゼンテーションのスクリプトを用いて実践的な英語表現を学ばせるとともに、語彙指導においては類義語や熟語間のニュアンスの違いに焦点を当て、語彙力の深化を促した。地域の主婦層およびシニア層を対象に、異文化理解をテーマとした英語学習講座を実施した。本講座では、英語学習に加えて異文化比較を重視し、異文化コミュニケーション能力の育成を目的とした内容で構成した。教材には、英語圏およびイタリア語圏の料理番組（Jamie OliverおよびGiada De Laurentiisの動画）を用い、これを日本の伝統的な料理番組と比較。調理スタイル、話し方、映像の構成やテンポなどの文化的差異に注目し、受講生がディスカッションを通じてその背景にある価値観や伝達様式の違いを考察できるよう設計した。さらに、林（1994、2011）によるアナログ思考・デジタル思考のフレームワークを導入し、文化的思考様式の違いを理論的に解説した。これにより、受講生が具体的な映像コンテンツから抽象的な文化理論へと理解を深める機会を提供した。本講座は、言語教育と異文化理解の統合的なアプローチによる地域貢献型学習活動として位置づけられ、参加者からも高い評価を得た。
2 作成した教科書、教材		
1. 異文化コミュニケーションと隣り合わせで英語を学ぶためのワークブック	2018年4月刊行	異文化接触のありようを具体的かつ理論的に整理することを通して、自文化と他文化の違いを知ることにより、自分自身と自文化を理解する。「違い」は楽しいことの重要性を実践的な英語表現を交えながら学び、現代社会のアイデンティティのあり方を考えるための教材。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 外資系ホテルでのコンシェルジュ業務 2. スカイプによる発音指導 3. 海外駐在員に対する英語と異文化研修		外資系ホテルで外国人ゲストの接客対応、本社との会議通訳・アテンド通訳業務を担当した。 海外駐在の日本人の主婦や子供たちに、発音指導を実施した。 海外駐在予定の銀行員の方々やその家族を対象に、生活するために必要な、サバイバルイングリッシュ講座を開講した。
4 その他		
1. ゴンザガ大学 女性リーダーシッププログラム研修	2025年2月23日2月28日	米国ゴンザガ大学との国際連携による女性リーダー育成プログラムに参加し、異文化理解、リーダーシップ、ジェンダー課題に関する実践的知見を得た。高校生を対象とした模擬授業を担当し、学科の教育内容や魅力をわかりやすく紹介することで、入学希望者の動機づけや進路選択の支援に努めた。また、MECの学生による発表コーナーの企画・調整も担当し、学生主体の活動が効果的に伝わるようにコーディネートを行った。 学科の2年次担任として、学生の奨学金推薦状の作成や進路支援等を担当した。個別面談を通じて学生の状況を的確に把握し、学修面および生活面の両面から支援
2. 武庫川女子大学英語グローバル学科 オープンキャンパスにおける模擬授業および学生発表の企画・運営	2024年9月22日	
3. 担任業務	2024年4月現在	

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		
4. 高大連携事業・入学前講義	2024年2月19日	を行った。 武庫川女子大学高大連携事業・入学前講義として武庫川女子大学附属高校3年生に対して、異文化コミュニケーションに関する講義と演習を実施した。
5. TOEIC対策授業における語彙力向上と評価の一貫性に関する取り組み	2023年4月現在	TOEIC対策授業（複数担当教員による開講）において、学生の語彙力定着を図るとともに、評価の一貫性を保つことを目的に、全クラス共通で使用できる単語テストを作成した。各教員が使用する教材内容をもとに、ユニットごとに出題範囲を統一し、語彙の難易度や出題形式にも配慮することで、学修成果が適切に測定されるよう工夫した。この取り組みにより、語彙力の強化に加え、複数クラス間における公平な評価と学修到達度の可視化が実現された。
6. 松山大学オープンキャンパス 模擬授業	2021年8月	松山大学オープンキャンパスにて「異文化コミュニケーションと隣り合わせで英語を学ぶ」というテーマで模擬授業を行った。
7. ゲストスピーカー	2018年11月	英米文学科、ブルース・ランダー先生ゼミ（4回生）帰国子女としてのアイデンティティ、修士論文のデータ収集方法、書き方、質疑応答等（90分）
8. 招聘ゲスト・スピーカー（プレゼンテーション、面接聴取法による言語調査協力）	2018年11月	英米文学科 久屋愛実先生ゼミ（3回生） プレゼンテーション発表（30分） テーマ：わたしの言語形成の歴史 （日本語・英語習得の過程） 面接聴取法による言語調査協力（60分） 1) 依頼表現 （日・英語話者として） 2) 褒め言葉に対する返答 （日・英語話者として） 3) 英語の代名詞について （英語話者として） 4) 英語の文法事項について （英語話者として）
9. ゲストスピーカー	2018年7月	英米文学科 ジェイ・アーカンブラック先生ゼミ（3回生） アメリカ文化、帰国子女としてのアイデンティティ 質疑応答等（90分）
10. ゲストスピーカー	2018年6月	英米文学科 ブルース・ランダー先生ゼミ（4回生） 帰国子女としてのアイデンティティ、修士論文のデータ収集方法、書き方、質疑応答等（90分）
11. ゲストスピーカー	2017年12月	英米文学科 ジェイ・アーカンブラック先生ゼミ（3回生） アメリカ文化、帰国子女としてのアイデンティティ 質疑応答等（90分）
職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. TOEIC		990点
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		
1. 学術論文査読（武庫川女子大学英文学会）	2024年1月	武庫川女子大学において、英文学会の査読委員として、投稿論文の内容確認および審査に携わった。微力ながら、研究の質の向上と学術的水準の維持に資するよう努めた。
2. TOEIC対策授業における語彙力向上と評価の一貫性に関する取り組み	2023年4月現在	TOEIC対策授業（複数担当教員による開講）において、学生の語彙力定着を図るとともに、評価の一貫性を保つことを目的に、全クラス共通で使用できる単語テス

職務上の実績に関する事項				
事項		年月日		概要
4 その他				
3. 学生主体による国際交流・地域連携活動の運営支援と報告業務	2023年4月現在	トを作成した。各教員が使用する教材内容をもとに、ユニットごとに出题範囲を統一し、語彙の難易度や出题形式にも配慮することで、学修成果が適切に測定されるよう工夫した。語彙力の強化に加え、複数クラス間における公平な評価と学修到達度の可視化に努めた。 学科公認の学生ボランティア団体MEC（Mukogawa English Community）において、年間を通じた国際交流活動、英語教育支援、SDGs関連イベントの企画・運営が円滑に進むよう、教員として活動全体の運営支援および関係部署との調整業務を行った。 本学生と留学生による京都での観光地案内などの学外活動では、事前準備やボランティア保険の手配、安全面と教育効果の両面に配慮した支援を行った。付属幼稚園との交流活動においては、当日の引率を担当し、園児との活動内容の検討や日程調整を行い、学生が主体的に取り組める実施体制を整備した。 また、SDGsをテーマとした地域連携活動では、地元企業との連絡調整を担当し、学生による自主的な企画・実施を支援した。これらの活動内容を整理し、日英両言語によるリンクレポートとしてまとめた。		
4. 人権教育に関する学内外での取組	2023年4月2025年3月	学内の人権教育推進委員会の委員として、学生への人権意識の向上に努めた。また、部落差別および被差別部落の歴史と現状に関する学術的理解を深めるため、同和問題に関する学会に参加し、研究発表や講演を通じて得た知見を教育実践に反映するよう努めた。		
5. 学内・外入試業務	2023年4月2025年3月	入試の試験監督や面接官を務めたほか、合否判定の補助にも携わるなど、学内外における入試業務全般に従事した。		
6. 作問委員会	2023年4月2025年3月	入試問題作成に関する委員会に参画し、問題の精査および校閲作業に協働して取り組んだ。		
7. 広報委員会（学科パンフレット・キャンパスガイド）	2023年4月2025年3月	学科の広報資料作成において、広報室と連携し、学生へのインタビュー依頼、写真撮影の調整、原稿執筆の依頼、構成案の検討、校正作業などを担当した。加えて、学科ホームページに掲載する記事の添削も協働して行った。		
8. 英語論文査読（武庫川女子大学英文学会）	2023年1月	武庫川女子大学英文学会において、英語による学術論文の査読を担当した。研究の妥当性や論理構成、学術的貢献度などを踏まえて慎重に確認し、学会誌の学術的水準の維持に、ささやかながら貢献できるよう努めた。		
9. 高校へ出張講義	2021年1月	第一学院高等学校に、異文化コミュニケーション・英語の学習について出張講義を行った。		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
2 学位論文				
1. A Study of Better Adaptation of Returnees to Japanese Culture and Education	単	2019年3月発行	松山大学大学院修士論文 英文、全7章、134頁	本研究は、海外生活が児童に与える心理的影響およびアイデンティティ形成への作用を検討したものである。研究対象として、著者自身の小学生時代におけるアメリカでの文化体験を記録した日記の記述と、2016年11月に実施した帰国子女（小学生）40名へのアンケート調査結果を用いた。分析には、グラウンデッド・セオリーの次元分析法を適用し、さらにベリー（2005）の異文化適応プロセスモデルを理論的枠組みとして活用した。その結果、帰国子女が日本社会への再適応において直面するストレス要因を4つの主要カテゴリーに分類することができた。また、被験者のうち2名が明確な「適応」を達成していることも明らかとなった。本研究は、多様な文化

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2 学位論文				
				背景をもつ児童の教育に携わる教員に対する多文化対応研修の必要性を示唆し、県や地域コミュニティ単位での実施を提案するものである。さらに、多文化共生社会の実現に向け、行政による包括的なガイドラインの策定の必要性も提言している。 (キーワード：異文化コミュニケーション、アメリカの教育制度、帰国子女、アイデンティティ、異文化適応)
3 学術論文				
1.Implications of a Guest Speech by a Malaysian Muslim Living in Japan on Japanese University Students	単	2022年12月31日刊行	広島大学大学院人間社会科学研究科 紀要・総合科学研究 査読付	This study examined the impact of a speech by a female Malaysian Muslim guest speaker on Japanese university students. Qualitative data analysis categorized the responses into: “Japanese students’ stereotypes and prejudice toward Malaysian culture and Muslims,” “Japanese students’ past knowledge of Malaysian culture and Muslims,” and “Japanese students’ interest in learning more about Malaysian language, culture, and religion.” After transcribing the comments, the student data were further classified using Milton J Bennett’s model of intercultural sensitivity development, DMIS (1986, 2011, 2013). The survey results showed that Japanese students’ attitudes toward foreigners and other cultures improved.
2.Cultural Identity Shifts After Study Abroad	単	2021年10月	松山大学論文集 第33巻4号	Although the number of students studying abroad is increasing, we know little about the impact of one-year sojourn on their identities. To investigate this, the author conducted interviews with 10 students who had studied abroad and asked them a series of 15 questions that asked how they viewed themselves before and after their study abroad experience. Milton J Bennett’s Developmental Model of Intercultural Sensitivity, DMIS (2009, 2013) was employed to analyze student data to explicate Japanese university students’ identity formation processes. The results of the analysis were that most of the Japanese students established their global identities by adjusting themselves to the host culture. This research reports on their identity formation process and discuss what roles educators can play in supporting those Japanese students who have had intercultural conflicts during their studying abroad from a cultural perspective.
3.How Intercultural Experiences Created Identities of Returnees : A Comparison of kikokushijo in the Taishou, Showa and Heisei eras	単	2019年4月	松山大学論文集 第31巻1号	本研究は、日本が多民族国家としての側面を持ちながらも、国際的には依然として「閉ざされた社会 (closed society)」と見なされる傾向にあるという状況を踏まえ、帰国子女のアイデンティティ形成過程に注目したものである。大正・昭和・平成の3時代にわたる帰国子女のデータをもとに、世代を超えた共通点および相違点を体系的に分析した。大正時代の事例としては、14歳で渡米(密航)し、苦学の末UCLAを卒業後、京都帝国大学で博士号を取得しながらも「異質な存在」として日本社会に受け入れられず、GHQ顧問として活動した筆者の曾祖父のライフストーリーを扱った。昭和時代には、著者自身の小学生時代のアメリカ滞在・帰国後の記録(日記データ)を、平成時代には現代の帰国子女40名を対象としたアンケート調査を実施した。
4.Analog and Digital Intercultural	単	2018年9月発行	言語文化研究, 38 (1-1)	その結果、多くの帰国子女が日本文化への再適応に葛藤を抱えていることが明らかとなり、日本社会および教育現場における文化的多様性への対応について、再考の契機を提供するものであると考えられる。
				(キーワード：異文化コミュニケーション、アメリカ文化、帰国子女、アイデンティティ) 本研究は、グローバル化が進む日本の教育現場において、異なる文化的背景を持つ外国人英語教員が、自身のメンタルモデルをいかに

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
Perception- The cultural impact on pedagogical decisions of foreign teachers in Japan				意識し、教育実践に活用できるかを検討することを目的とした。調査対象として、日本在住の欧米出身教授43名に対し、左右脳の主導性に関する1～6のリッカート尺度によるアンケート調査を実施し、その結果を量的・質的の両面から分析した。
5.The Reintegration of Kikokushijo: Reflections on Culture and Identity	単	2018年9月発行	言語文化研究, 38 (1-2)	その結果、異文化間の共存環境を築く上で、文化的に刷り込まれた無自覚な思考パターンを認識し、状況に応じて柔軟に思考を切り替える能力の重要性が示唆された。本研究は、異文化間の相互理解や英語教育における多様性への対応について、今後の教育現場での議論や実践を考える上で、一つの視点を提供するものである。 (キーワード：異文化コミュニケーション、外国人教授、英語教育、メンタルモデル、思考様式) 本研究では、現代の小学生の帰国子女40名を対象に実施したアンケート調査をもとに、ベリー (2005) の異文化適応プロセスモデルを理論的枠組みとして分析を行った。その結果、帰国子女が日本社会へ再適応する際に経験するストレス要因として、4つの主要なカテゴリーを抽出することができた。 また、調査対象児童のうち2名が文化的・社会的環境への「適応」を達成していることが確認され、個人差や背景要因の影響が示唆された。帰国子女のアイデンティティ形成および教育的支援に関する知見として、異文化間で育つ子どもたちへの理解と支援の必要性を提起するものである。
6.Returnees' Reentry Struggles to Japanese Culture and EducationExploring the	単	2017年12月発行	松山論叢第37号掲載 (p21～p45)	(キーワード：異文化コミュニケーション、アメリカの教育制度、帰国子女、アイデンティティ、異文化適応) 本研究は、帰国子女が日本社会に再適応する際に直面する心理的葛藤の要因を明らかにすることを目的とし、日米の文化および教育制度の類似点・相違点を比較・分析した。研究には、著者自身の小学生時代のアメリカ生活および帰国後の観察記録(日記データ)に加え、現代の帰国子女40名を対象とした半構造化アンケートによる質的分析を用いた。分析の結果、西欧圏(左脳主導型文化)で幼少期を過ごした児童は、アジア圏(右脳主導型文化)からの帰国子女に比べ、日本社会への再適応において多くの葛藤を経験していることが明らかとなった。滞在国の文化的特性が思考様式の形成に影響を与え、それが帰国後の適応過程に反映されることが示唆された。 本研究は、多文化環境で育つ児童への理解や支援の在り方を改めて考える一助となり得るものであり、今後の教育実践や支援の在り方を検討する上で、一定の示唆を提供することを目指した。
7.Intercultural Identities of Kikokushijos - A Comparison of Returnee Experiences in Three Different Eras	単	2017年12月発行	松山論叢第38号掲載 (p23～p54)	(キーワード：帰国子女、再適応、異文化コミュニケーション、認知スタイル、文化的葛藤) 本研究は、大正・昭和・平成という3つの異なる時代における帰国子女の体験に注目し、世代を超えた共通点および相違点を体系的に分析したものである。14歳で渡米し、苦学の末UCLAを卒業後、京都帝国大学で博士号を取得するも、日本社会では「異質な存在」として受け入れられず、最終的にGHQ顧問として活躍した筆者の曾祖父のライフストーリーを主軸に、著者自身の小学生時代の日記データ、さらに現代の帰国子女40名へのアンケート調査結果を組み合わせ分析を行った。 これらのデータをもとに、帰国子女が直面する文化的摩擦やアイデンティティ形成のプロセスを考察し、日本社会が抱える同質性への志向や異文化受容の課題を明らかにした。多様な文化背景をもつ個人が「異質な存在」として扱われる構造的背景に光を当て、多文化共生社会としての日本のあり方を問い直す視座を提示している。 (キーワード：異文化コミュニケーション、アメリカの教育制度、帰国子女、アイデンティティ、文化的受容)
その他				

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1.Multifaceted Analysis of Immigrant Conflicts and Integration Processes in Mukogawa Danchi	単	2023年11月12日	異文化コミュニケーション学会 (SIETAR Japan) の年次大会 (国立オリンピック記念青少年総合センター、代々木オリンピックセンター (採択))	This research explores the challenges faced by immigrants in Mukogawa Danchi, including language barriers, cultural differences, and employment issues, using mixed research methods. It aims to analyze their adaptation strategies and the support mechanisms from the community and government, proposing policy recommendations for better integration and suggesting future research directions.
2.How study abroad experiences alter beliefs in cultural identity	単	2020年11月	SIETAR Japan Online Conference 2020 2020シーター ジャパン オンライン年次大会	This study indicates how study abroad experiences for prolonged periods of time ranging from 3 months to a year, have influenced student identities. Eleven students, 7 female and 4 male ranging in age from 20-23, were interviewed by the researchers up to two months after returning to Japan. Interviews comprised of a series of 15 questions that asked recipients how they viewed themselves before and after their life changing experience. Results have suggested that study abroad can alter national identity beliefs and illustrate a shift in cultural identity.
3.Cultural Identity Shifts After Study Abroad	単	2020年5月	JALT PanSIG 2020 Intercultural Communication and Mobility	This study indicates how the identities of students who have studied abroad for various lengths of time ranging from 3 months to a year, have changed over time. 11 students were asked a series of 15 questions that asked them how they viewed themselves before and after their study experience. This research may be of interest to those wishing to discover more about the complex identity issues students have during and on returning from prolonged study abroad experiences.
4.The Reintegration of Kikokushijo : Reflections on Culture and Identity	単	2019年10月	異文化コミュニケーション学会 DifferencesConference 京都産業大学 “Living on the Edge: The Joys & Challenges of Being Different in Japan”	本研究では、現代の小学生の帰国子女40名を対象に実施したアンケート調査の結果を、ベリー (2005) の異文化適応プロセスモデルを用いて分析した。調査により、帰国時に経験するストレス要因として4つの主要なカテゴリーを抽出することができた。また、被験者のうち2名が「適応」を達成していることが明らかとなり、帰国子女の文化背景や適応プロセスの多様性が示唆された。本研究は、帰国子女の再適応支援や教育現場での対応を考える上で、ささやかな一助となることを願うものである。
5.The cultural impact on pedagogical decisions of foreign teachers in Japan	単	2019年6月	第10回JALT全国語学教育学会四国支部 愛媛大学 発表言語 英語	本研究は、グローバル化が進む日本の教育現場において、日本人学生とは異なる文化的背景を持つ言語教員が、自身のメンタルモデルをどのように意識し、英語教育において活用しうるかを検討することを目的とした。日本在住の欧米出身の大学教員43名を対象に、左右の脳の主導性に関する1～6のリッカート尺度によるアンケート調査を実施し、量的・質的両面から分析を行った。その結果、文化的背景によって形成される無自覚な思考パターンを認識し、状況に応じて柔軟に思考様式を切り替える能力の重要性が示唆された。本研究は、多文化共存を目指す教育現場において、異文化理解と教育実践を考える上で、一助となることを期待するものである。
6.Analog and Digital Intercultural Perception	単	2019年6月	第9回JALT全国語学教育学会四国支部 四国学院大学	本研究は、英語教育の観点から、グローバル化する日本の教育現場で日本人学生とは異なる文化的背景を持つ言語教員が、自身のメンタルモデルを意識し、活用することの可能性を検討することを目的とする。そこで、日本在住の欧米人教授43名を対象に左右の脳の主導性に関する1～6のリッカート尺度によるアンケート調査を実施し、量的・質的に検討した。この結果から、自身の文化と異なる学生を指導する際には、自身の文化パターンのみにとらわれず、相手の文化パターンも自由にシフトする事が出来る能力が重要になり、

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
7. Bilingualism and Identities-A Comparison of Returnee Experiences in Different Eras	単	2019年1月	全国語学教育学会 JALT松山支部 愛媛大学 バイリンガリズムミニカンファレンス Matsuyama JALT Bilingualism Mini-Conference	その為には、自身のメンタルモデルを自覚する事が何よりも重要である事が示唆された。 本研究は、バイリンガリズムおよびアイデンティティ形成の観点から、大正・昭和・平成という3つの時代にわたる帰国子女の体験を比較し、共通点および相違点を体系的に分析したものである。大正時代のデータとしては、14歳で渡米（密航）し、UCLAを卒業後に帰国、日本の官僚を志すも「異質な存在」として受け入れられず、最終的にGHQ顧問となった筆者の曾祖父のライフストーリーを採用した。昭和時代の事例として、著者自身の小学生時代のアメリカ生活と帰国後の生活を綴った日記データを用い、平成時代には現代の帰国子女40名を対象としたアンケート調査を実施した。これらのデータをもとに、各時代における帰国子女の言語経験と文化適応のあり方を考察し、多文化社会としての日本社会の在り方について再検討する契機を提示することを目的とした。
8. Analog and Digital Intercultural Perception -The cultural impact on pedagogical decisions of foreign teachers in Japan	単	2018年8月	第33回異文化コミュニケーション学会 国際大会 中央大学、多摩キャンパス 大会テーマ： 「異文化共存に向けて：不確実な未来に共に向き合う」 “Facing uncertain times together Strengthening intercultural connections”	本研究は、グローバル化が進む日本の教育現場において、日本人学生とは異なる文化的背景を持つ外国教員が、英語教育と並行して自身のメンタルモデルをいかに意識し、教育実践に活用できるかを検討することを目的とした。日本在住の欧米出身の大学教員43名を対象に、左右の脳の主導性に関する1～6のリッカート尺度を用いたアンケート調査を実施し、量的および質的分析を行った。その結果、文化的背景により無自覚のうちに形成される思考パターンを認識し、状況に応じて柔軟に思考様式を切り替える能力が、多文化共存環境の構築において重要であることが示唆された。本研究は、教育現場における異文化間理解と、多様性に対応した教授法の在り方を考察する一助となるものである。
9. The Reintegration of Kikokushijo - Reflections on Culture and Identity	単	2018年5月	JALT全国語学教育学会定例会松山支部 愛媛大学(愛大ミュージズ)	本研究では、現代の小学生の帰国子女40名を対象に実施したアンケート調査の結果を、ベリー（2005）の異文化適応プロセスモデルを理論的枠組みとして分析した。調査により、帰国子女が日本社会に再適応する過程で経験するストレス要因について、4つのカテゴリーを抽出することができた。さらに、被験者のうち2名が適応的な対応を示していることが明らかとなり、帰国子女の適応には個々の文化経験や背景による差異があることが示唆された。本研究は、帰国子女への支援の在り方や、教育現場における異文化理解の促進に向けた示唆を提供するものである。 （キーワード：帰国子女、異文化適応、ベリーのモデル、再適応、小学生）
10. Exploring the Intercultural Identities of Kikokushijos- A Comparison of Returnee Experiences in Three Different Eras	単	2017年10月	第32回異文化コミュニケーション学会 年次大会 上智大学、四谷キャンパス 大会テーマ： “Promoting Equity and Social Change: Acknowledging the Diversity Within” 「公正な社会への変革をめざして：内なる多様性を再考する」	本研究は、大正・昭和・平成という異なる3つの時代における帰国子女の体験を対象とし、世代を超えた共通点および相違点を質的・量的に分析したものである。筆者の家族史や自身の記録、現代の帰国子女へのアンケート調査を通じて、各時代の社会的背景のもとで帰国子女が経験した文化的葛藤やアイデンティティの揺らぎを検討した。本研究は、帰国子女の個別の苦悩に光を当てると同時に、異文化背景をもつ人々が共に生きる社会のあり方を問い直す視点から、多文化共生社会としての日本の再検討の契機を提示するものである。 （キーワード：帰国子女、世代間比較、多文化共生、文化的葛藤、異文化理解）

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
11. A Study of Better Adaptation of Returnees to Japanese Culture and Education.	単	2017年2月	松山大学大学院 言語コミュニケーション研究科 第5回定例会	本発表では、著者が小学生時代に記録したアメリカ滞在中の日記に見られる異文化適応に関する葛藤の記述と、2016年11月に実施した現代の帰国子女（小学生）40名を対象としたアンケート調査結果を分析対象とした。分析には、エドワード・T・ホルの文化の氷山モデルを理論的枠組みとして用い、日本とアメリカの文化的・教育制度的な類似点および相違点を比較検討した。表層的な行動様式だけでなく、価値観や思考様式といった深層文化の違いに注目することで、帰国子女が経験する文化的葛藤の背景要因についての理解を試みた。 （キーワード：文化の氷山モデル、帰国子女、異文化葛藤、日米比較、教育制度）
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
6. 研究費の取得状況				
学会及び社会における活動等				
年月日		事項		
1. 2016年6月～現在		JALT全国語学教育学会松山支部 2019年 Best Member of the year 受賞		
2. 2015年4月～現在		異文化コミュニケーション学会 SIETAR Japan		